

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り複製および再配布することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

The University of Tokyo 学術フロンティア講義 2024 野澤 俊太郎



2024年6月7日
学術フロンティア講義



空間・技術・創造力—建築史からの示唆

東アジア藝文書院（EAA）

野澤俊太郎

本講義の概要

考察の対象

- 1910年代後半から1930年代前半までの日本
- 当時の最新技術であった電気照明
- 住宅

目的

- 電気照明の普及によって人々の明るさおよび空間の認識がいかに変化したのかを浮かび上がらせる
- そのような認識の変化が照明および建築デザインに与えた影響を概説する

到達点

- 本講義と過去6回の講義を結び付けてみる
- 「惑星時代の人間」という問いについて考える

目次

- 1 電光
- 2 陰翳
- 3 結びにかえて

1 電光

電気照明のはじまり

- | | | | | | |
|------|--------|---|---------------------------|----------------|-----|
| 1878 | (明治11) | 年 | アーク灯屋内点灯 | 工部大学校 (現東大工学部) | 講堂 |
| 1882 | (明治15) | 年 | アーク灯屋外点灯 | 銀座・大倉組 (現大成建設) | 社屋前 |
| 1882 | (明治15) | 年 | エジソン電灯会社による世界初の電気事業開始 | | |
| | | | 炭素フィラメントの白熱電球実用化 | | |
| 1887 | (明治20) | 年 | 東京電燈 (現東京電力) | 営業開始 | |
| 1890 | (明治23) | 年 | 白熱舎創設 | | |
| 1899 | (明治32) | 年 | 白熱舎、東京電気 (現東芝) | へと社名変更 | |
| 1911 | (明治44) | 年 | タングステンを用いた電球販売 (マツダランプ) | 開始 | |
| 1912 | (大正01) | 年 | 水力発電の出力が火力発電の出力を上回る | | |
| 1917 | (大正06) | 年 | 工業動力の総馬力数に占める電動機の割合が半数超える | | |
| 1921 | (大正10) | 年 | 東京・京橋新橋間に電気街灯148本建設 | | |
| 1928 | (昭和03) | 年 | 御大典 | | |



名古屋本町通夜景 御大典後と推定
 名古屋市図書館所蔵
 なごやコレクションウェブサイト



大須商店街夜景 1930年代後半と推測
 名古屋市市政資料館所蔵
 なごやコレクションウェブサイト

電化率の推移

年	全国*	東京府**
1905（明治38）年		2.5 %
1907（明治40）年	2 %	
1910（明治43）年		14.9 %
1915（大正04）年		63.5 %
1917（大正06）年	42 %	
1925（大正14）年		96.9 %
1927（昭和02）年	87 %	
1930（昭和05）年		97.4 %
1935（昭和10）年		98.7 %

出典

- * 新電気事業講座編集委員会（1977）
『電気事業発達史』
- ** 西野寿章（2014）「東京の電気事業と電源開発」
『地学雑誌』 123(2): 298–314

国	年度	普及率
スイス	1933（昭和08）年度	99 %
日本（内地）	1935（昭和10）年度	89 %
スウェーデン	1932（昭和07）年度	85 %
ドイツ	1935（昭和10）年度	85 %
ベルギー	1933（昭和08）年度	70 %
アメリカ	1935（昭和10）年度	68 %
オーストリア	1933（昭和08）年度	60 %
イギリス	1933（昭和08）年度	44 %

出典

電気学会（1939）『本邦に於ける晩近の電気工学』 p. 496

局部照明

- 床置き型の行灯（あんどん）を身体に近づけて使用



水野年方画『水野年方新聞小説挿絵』58 1900年頃の作品



櫻井家住宅 島根県仁多郡奥出雲町
2023年11月21撮影

局部照明

- 天井から吊るした石油ランプを顔に近づけて使用



水野年方画『水野年方新聞小説挿絵』46 1900年頃の作品

日常としての暗さ

- 雨戸や軒の深さにより
生み出される暗さ
- 屋内照明は身体の周り
をほの明るくするもの



千葉県佐原市某住宅 2024年4月21日撮影

暗さの否定

- 「明るい家には福の神」「暗い家には貧乏神」
- 住空間の暗さと不健康さを結び付ける生政治的な商業広告

「高燭電燈のおすゝめ」『マツダ新報』1928年3月号
資料提供：東芝ライテック株式会社

高燭電燈のおすゝめ

Mrs. Ume McGlew, Japanese Woman of Kobe
Motors Through United States And Britain

Mrs. Ume McGlew, a Japanese woman living at Shioya, a western suburb of Kobe, recently returned from a 10,000-mile automobile trip through the United States and Great Britain. She is probably the first Japanese woman that has motored such a long distance.

Mrs. McGlew is the wife of Mr. A. L. E. McGlew, general manager for Japan of the Vacuum Oil Company of New York, with his office in Kobe. He was decorated by the Japanese Government for meritorious services during the Russo-Japanese war.

In their trips through the United States and Britain, the McGlews were accompanied by Mr. McGlew's brother and sister-in-law, Mr. and Mrs. A. E. McGlew, of San Francisco.

On April 24, 1926, Mr. and Mrs. McGlew with their son Robert sailed from Kobe for America. Arriving in Victoria, B. C., toward the middle of May, the party went to San Francisco, where they met brother and sister-in-law.

Mrs. McGlew, "was our climb by car right up to the summit of Pikes Peak in the Rockies, which rises 14,100 feet above the sea level near Denver, Colorado. A wonderfully fine though zigzag motor road is laid out from its base to its top, and one can comfortably and safely drive, as we did, right up to the summit, enjoying a grand view of the vast expanding country."

"Fortunately we met without accidents either in Great Britain, although the results of accidents in which were concerned the burning of a married man's motor into a far more fatal two."

學而第一
子曰學而時習之不亦說乎
有朋自遠方來不亦樂乎
人不知而不愠

論語卷之一

朱熹集

昔

と

今

新學期が始まりました

お子達の御勉強には是非明るい電燈をおすゝめ致します

電燈は間ごと	
三疊ノ間ニハ	二十ワット
四疊ノ間ニハ	三十ワット
六疊ノ間ニハ	四十ワット
八疊ノ間ニハ	六十ワット
十疊ノ間ニハ	百ワット

お宅の電燈は上の標準に比べて暗くはありませんか
一日僅か敷島一、二本の御奮發で宅の電燈は見違へるほど明るくなり
お子達の學校の成績も著しく進歩いたします

世界有数の近視眼國民

驚くべき近視眼の増加率

最近吾國民一般の近視眼の増加は驚くべき率でありまして年々徴兵検査の成績に就て見ても壯丁の三割以上の近視眼があり殊に先年報知新聞に發表された近視眼の統計は左表の通りの驚くべき數を示して居ります

近視眼増加表(百人ニ付) 大正十三年十一月 報知新聞所載

學校名	大正五年	全八年	全十二年
帝國大學	四五・八人	五四・九人	五五・六人
高等學校	四一・八人	四四・一人	五〇・〇人
女子高等學校	四〇・六人	四三・四人	四七・六人
女子師範學校	二〇・二人	二五・〇人	二七・三人
女子師範學校	一五・九人	一五・四人	二二・四人
女子師範學校	一〇・二人	一四・七人	一八・五人
女子師範學校	一〇・二人	一四・七人	一八・五人

刻苦十幾年大學を卒業して愈々活社會に働くべき新學士の半数以上は最早完全なる眼の持主ではありません
何故こんなに近視眼が多いのでせうか?

我が國の教育が普及して眼を使ふことが烈しくなり印刷術の進歩のため昔の字と今の字は大きに於て非常な差があり殊に中等學校以上に進む人が大變増加して眼を使ふことが甚しいのに拘らず明りの使ひ方が不十分なために外ならないのであります
果して米國の電燈は一燈平均六十三燭であるのに吾國のはまだ平均十四燭にも達しない状態であります

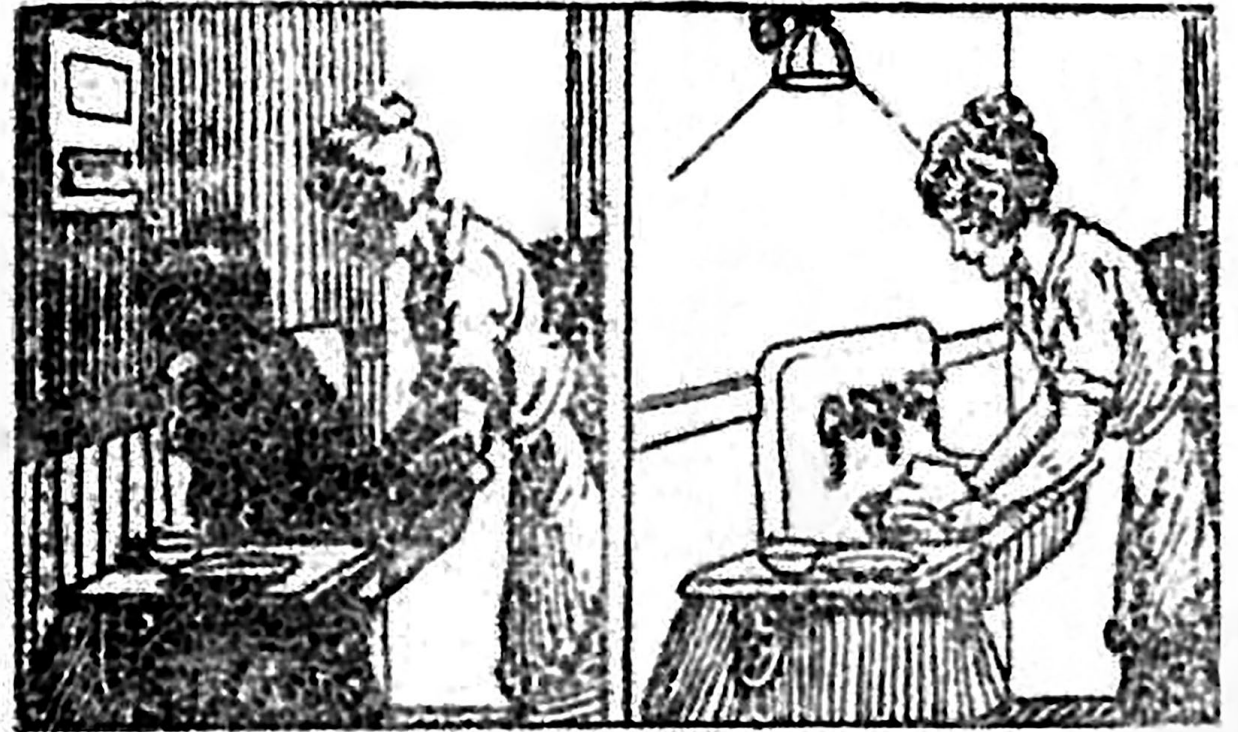
阪神電氣鐵道株式會社電氣課

全般照明

- 1916（大正5）年 照明学会創設
- 照明が建物に固定
- 影を生み出さないことが前提

局部照明 → 全般照明
近接性 → 三次元性

第一九圖 臺所流場



不良

良照明

照明学会編『照明及電熱講演集』1927 p. 201

電灯利用の様相

- 裸電球がぶら下がっているだけ

森鷗外・夏目漱石住宅（c. 1887）
博物館明治村 愛知県犬山市
2023年11月12日撮影



電灯利用の様相

- スイッチやコンセントの不在

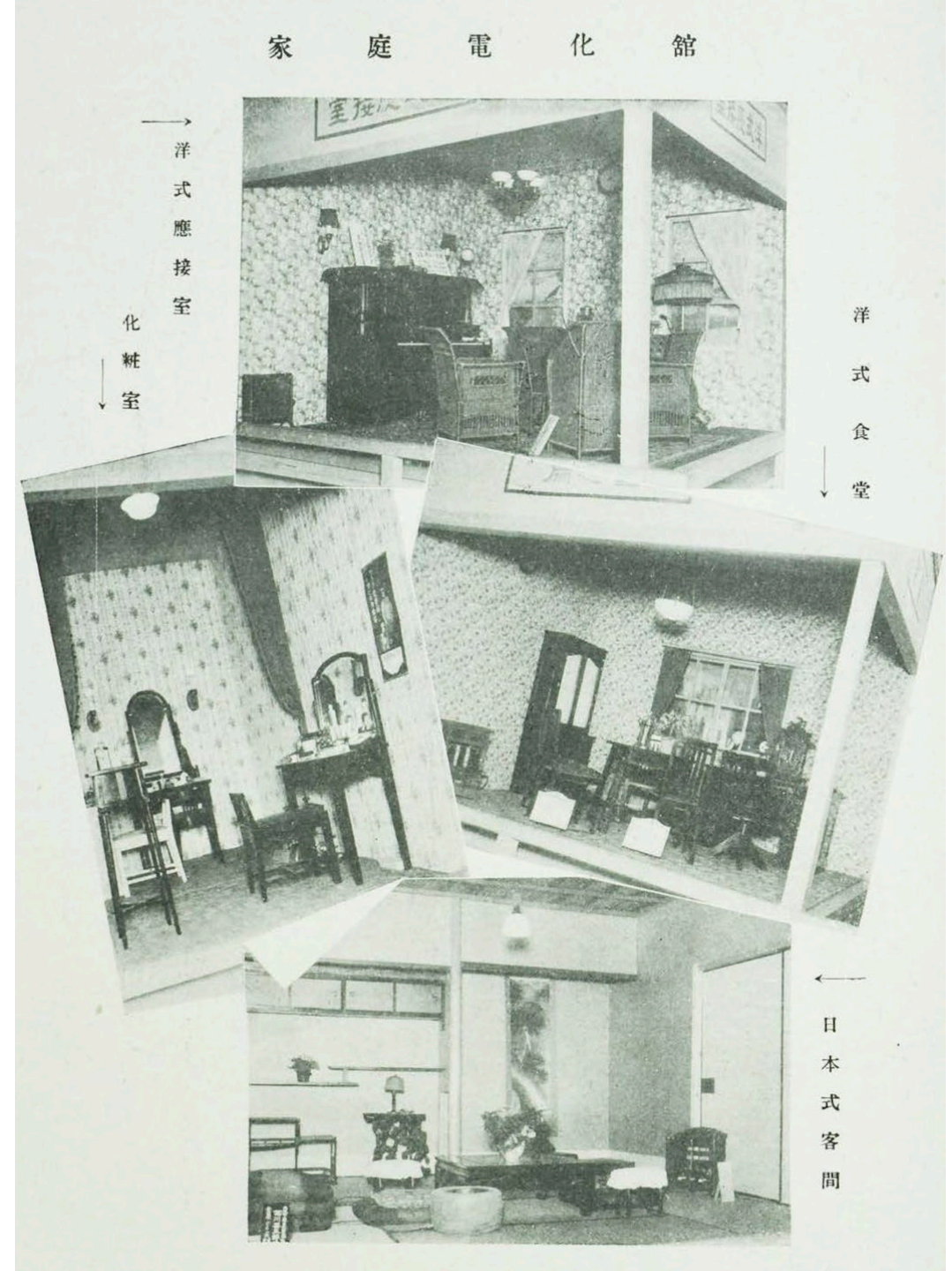
松下電器（現パナソニック）1931年の広告
松下電器産業宣伝事業部編
『松下電器宣伝70年史』1988 p. 17



家庭電化の機能主義

- 1924（大正13）年 家庭電気普及会創設
- 会頭 後藤新平
- 主に電力供給事業者による団体
- 機能的な電気利用の普及啓発
- 百貨店等にて展覧会開催
- モデル住宅の建設

電気大博覧会家庭電化館
『マツダ新報』1926年4月号 p. 27
資料提供：東芝ライテック株式会社



家庭電化の機能主義

- 「住み良い家」のための住宅電気標準仕様書作成
- 室の使われ方（機能）と電気設備の対応関係が前提
- 機能主義的な家庭電化がもたらす近代的快適性

近代的快適性
＝機能主義的な家庭電化

昭和四年三月制定

社団法人家庭電気普及会

東京市麹町區有樂町一ノ三

住み良い家

住宅電気標準仕様書

社団法人家庭電気普及会制定

室	電燈	點滅器	電氣口	備考
名義	天井	一ヶ所用二ヶ所用	小型大型	
玄關土間	一	一	一	土間の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
玄關	一	一	一	欄間等としては、別に大電氣口一ヶ所を設けるのが良い。
家族室	一	一	一	欄間等としては、別に大電氣口一ヶ所を設けるのが良い。
居間	一	一	一	欄間等としては、別に大電氣口一ヶ所を設けるのが良い。
客間	一	一	一	欄間等としては、別に大電氣口一ヶ所を設けるのが良い。
書齋	一	一	一	欄間等としては、別に大電氣口一ヶ所を設けるのが良い。
臺所	一	一	一	二ヶ所以上の場合は、別に大電氣口一ヶ所を設けるのが良い。
浴室	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
洗面所	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
脱衣室	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
便所	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
階段室	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
廊下	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
門軒	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
車寄	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
納戸	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
配膳室	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
食室	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
寢室	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
化粧室	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
洗濯場	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
電話室	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
壁燈	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
點滅器	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
小型電氣口	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。
大型電氣口	一	一	一	浴室内の狭い場合には、欄間等を用いても良い。

本仕様書は住宅の各室に配置された電燈、點滅器及び電氣口数の最低を示したものである。

壁燈の高さは床上一メートル内外が良い。

點滅器は、電燈と別々に壁、柱又は天井等に取付ける點滅器を云ふのである。

二ヶ所點滅器は、一つの電燈を二ヶ所から點滅し得るものを云ふのである。

點滅器の高さは、床上一・二メートル内外が良い。

小型電氣口は、一キロワット以下の電氣器具を使用する電氣口で、床面近く壁廻りに取附けるものである。

大型電氣口は、一キロワット超過の電氣器具を使用する電氣口である。

炊事用電熱は家族一人當り五〇〇ワットを標準として最低一・五キロワットを設備すれば良い。

室全体を温めるには坪當り五〇〇ワット（平方メートル當り一五〇ワット）を標準として計算すれば良い。

以上

家庭電化の機能主義

- ・新中間層の要求に即し、新中間層にとっての理想を形成



電気普及会発行雑誌『拓けゆく電気』1936年1月号

2 陰翳

眩しさへの反動

- 国産の行灯型スタンドライトの浸透
- 効率一辺倒に対する照明技術者たちの疑問



電気普及館家庭照明室「和室」
大阪市電気局『電気普及館案内』1930 p. 7

藤井厚二（1888-1938）と《聴竹居》

- 東京電燈が営業を開始した翌年に生誕
- 東京帝国大学建築学科卒業後、竹中工務店に勤務
- 1920（大正9）年 京都帝国大学着任
- 5つの実験住宅（自邸）を建設
- 環境工学の原理に基づく微気候のコントロールを通じた住宅デザイン



藤井厚二《聴竹居》外観（1928）
藤井厚二『聴竹居図案集』1929

眩し過ぎる電灯批判

夜間に於ける照明は行燈其の他紙を通過せる光によりたるものが、電燈を使用して以来其の直接照明によって全く此の特徴を破壊されたので、近来間接照明其の他適當なる方法によって、軟き光線を使用すべきことが盛に推奨されて居ります。（p. 145）

<前略>西洋の建物内に於ける光線は極めて硬き感を与へますが、我国の住宅に於ては其の窓に紙障子を嵌むるのみならず、先に述べたる如く外部には縁側や深い軒があり、特に光線の強き夏季には軒に簾を下げるので、天空より直接来る光線は比較的少く、地上の諸物体の表面に反射したる光線に多くよるので、頗る軟き感を与へます。従って西洋住宅と日本住宅との間には室内に於ける感興に著しい相違があって、西洋住宅にて明快の感を享樂し得れば日本住宅に於ては静寂の感に浸ることが出来ます。（p. 147）

藤井厚二『日本の住宅』岩波書店 1932

散光を生み出す紙の魅力の再発見

夜間電燈による直接照明を為す場合には甚しく此の特徴は破壊されます。和風住宅に於て私の最も不満に感ずる点は夜間の照明にして、多くの場合に此の方法に拠って居ります。之を昼間と同様に軟かき光線を使用すれば頗る気持よく感じます。＜中略＞最も簡単に電燈の光を軟かくなす方法は紙を使用することにして、電球よりの光線を一度薄美濃紙を通過せしむれば＜中略＞住宅に於ける電燈照明には此の方法を推奨します。（pp. 148–149）

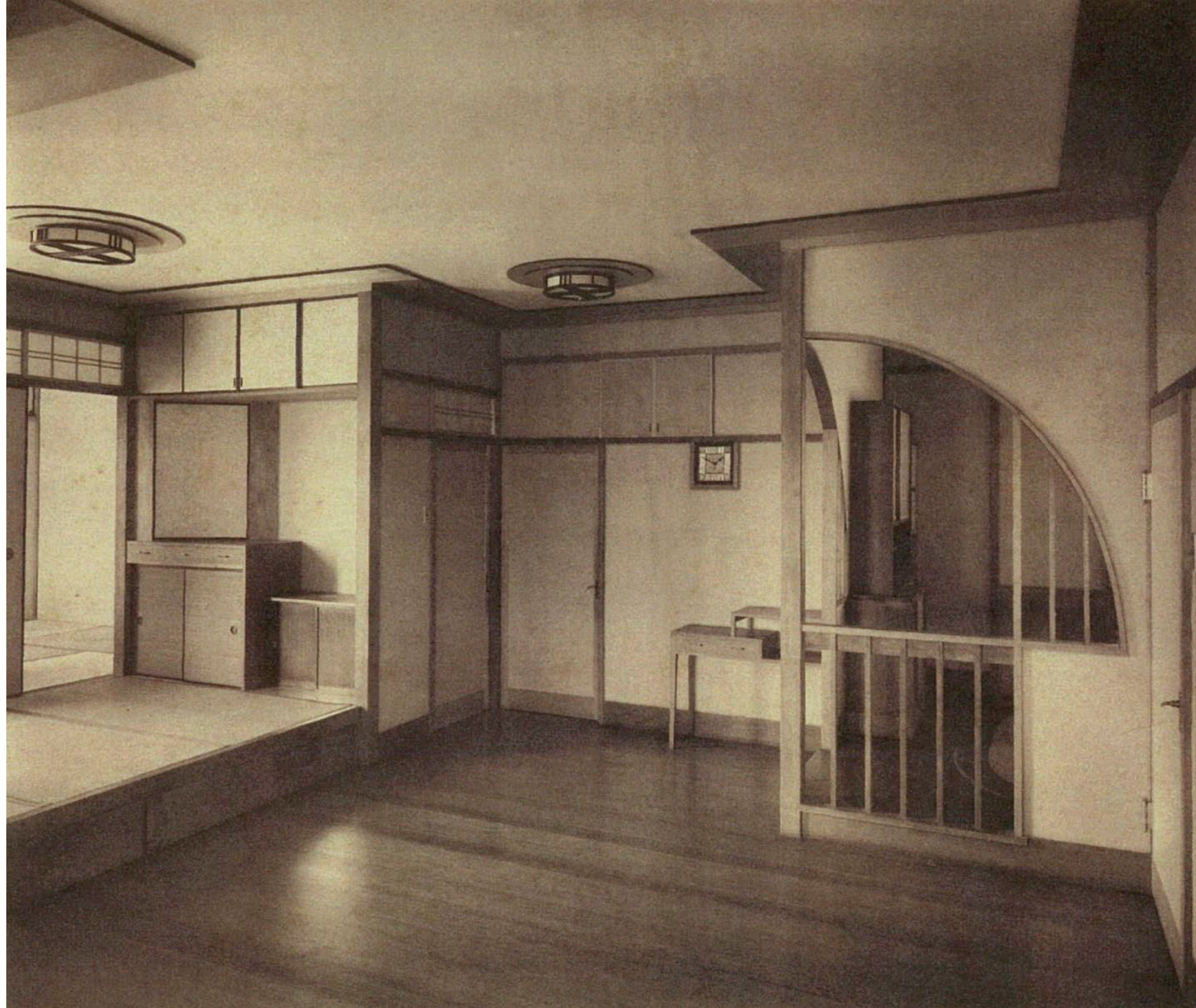
我国の美術品は散光によって鑑賞せらるるのを適當となし、若し然らざる場合には極めて貧弱に見ゆるものが澤山あります。例へば、茶道に於ける諸種の器具は硬き光線にて見れば感興は起りません。（pp. 145–146）

藤井厚二『日本の住宅』岩波書店 1932

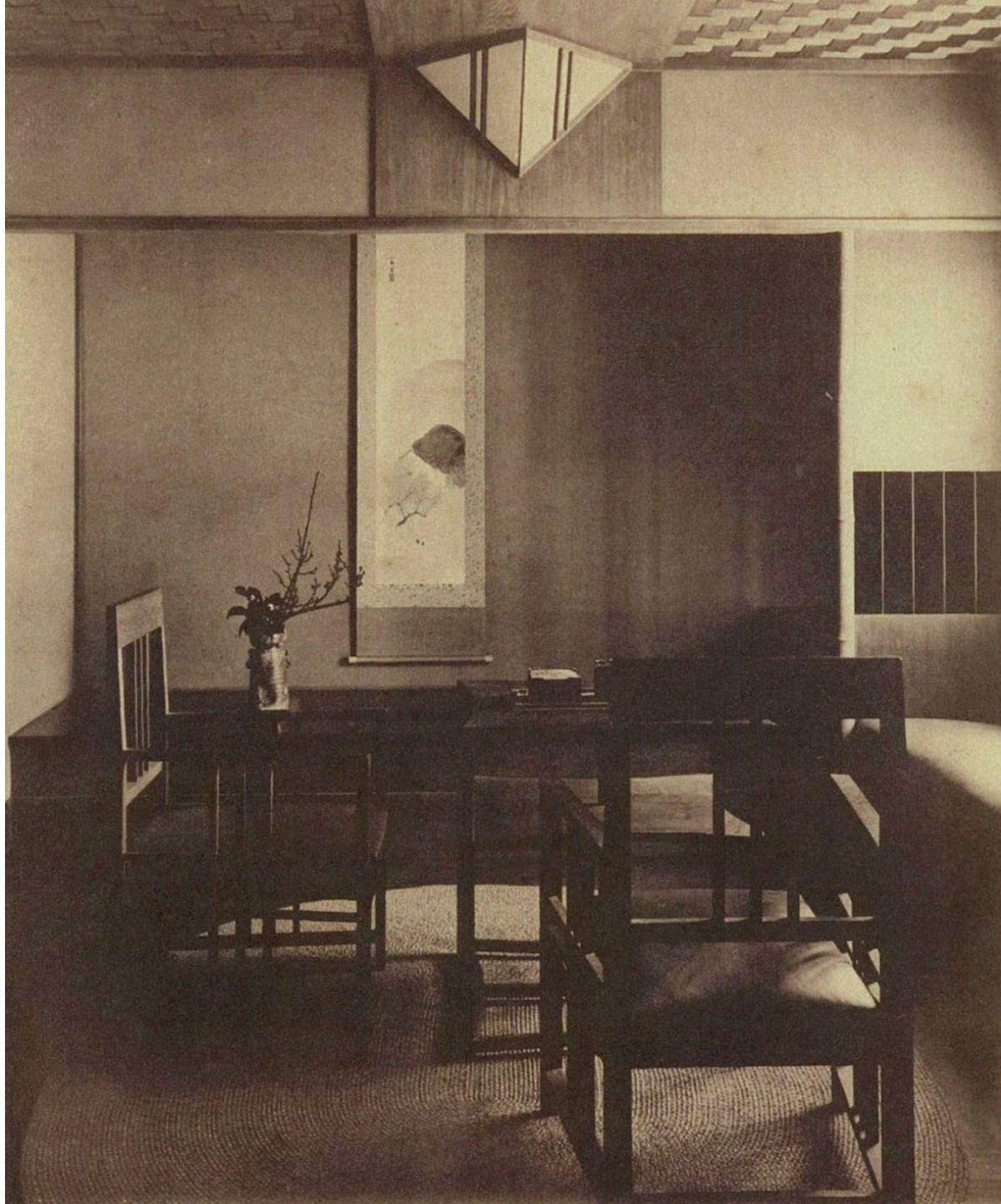
散光を生み出す紙の魅力の再発見

＜前略＞或人から我国の住宅建築に於て昔より硝子を持って居なかったことを遺憾とする嘆声を聞きましたが、私は上述の理由によって紙を持って居たことを喜びます。日本紙は温度及び湿度の調節にも有効にして＜中略＞紙を除けば日本の住宅の面白味は全く没却されます。（pp. 149）

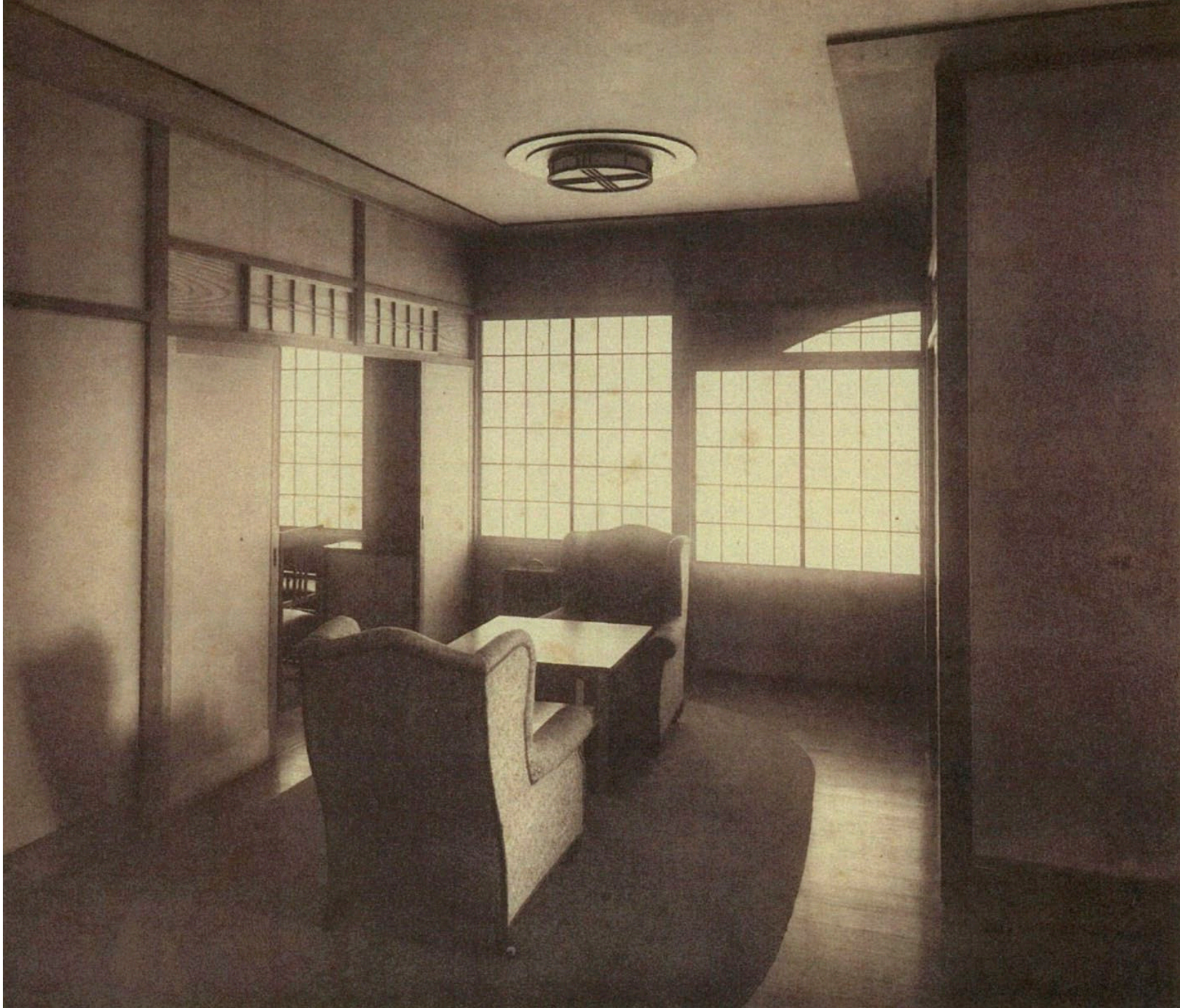
藤井厚二『日本の住宅』岩波書店 1932



藤井厚二《聴竹居》居間（1928）
藤井厚二『聴竹居図案集』1929



藤井厚二 《聴竹居》床の間（1928）
藤井厚二『聴竹居図案集』1929



藤井厚二 《聴竹居》居間（1928）
藤井厚二 『聴竹居図案集』 1929

日本紙を用いた照明器具の効果*

正會員 關 重 廣

(東京電氣株式會社)

正會員 谷 鹿 光 治

(東京電燈株式會社)

序

日本紙を用いた照明器具は從來諸所に見受けられたのであるが、京都帝國大學藤井厚二博士は數年前よりかゝる器具を同氏の設計になる建築に應用せられ、その多くの實例を發表せられて居る。所がかかる日本紙の照明器具は其能率が問題になるので、氣分は好いが能率が悪からうといふやうな懸念もあつたので、吾々はかゝる器具に就て能率其他の實驗を行つたのである。

實 驗

此實驗は日本紙を以て作つた所の數種の照明器具を種々の位置に取附けて其照明能率其他を試験し、更に之を從來の硝子製の器具と比較をした。この爲に用いた紙は藤井博士の選定にかゝる薄美濃紙で懇々同博士から御惠與にあづかつたものである。又木の枠は手製で拵へて作つたものである。此實驗の種目は次の如くである。尙此實驗種目の番號は圖面其他にも共通に使はれて居る。

- (1) 1邊30cm. の正立方體の燈器を天井の4隅に取附けた場合(第1圖)
- (2) 同上の燈器を天井の各邊の中央に取附けた場合(第2圖)
- (3) 底の一邊88cm. 高さ25cm. の正4角柱の扁平形燈器を天井の中央に直附けた場合(第3圖)(此場合には内部に4箇の電燈が取附けられてある)
- (4) 同上の燈器を(3)の場合よりも35cm. 下げて取附けた場合
- (5) 同上の燈器を全部天井へ埋込んで底の面だけを發光面とした場合(發光面と天井とは同一平面上にある)但し此場合は本當にするには天井を壊さなければ出來ないのであるから、實際は前の器具の上と横とを黒い紙で外を覆うて光の出ないやうにし、作業面を25cm. だけ下げて測定したのである。天井には光が當らないのであるから斯ういふ風な方法を探つても差支はないと思はれる。唯強いて言へば、作業面が下つたので襖や障子其他の反射の影響が幾分違ふことがあり得ると言へないことはないが、殆ど斯かる影響は無視し得ると思ふ。
- (6) (1)及び(2)の場合と同じ燈器を天井中央に直附けた場合
- (7) 硝子製外球を(4)の場合と同じ位置に取附けた場合。但しこの外球は東京電氣會社製新バラソリヤの白色を採用した。

* Effects of Japanese Papers applied on Luminaires, By S. Seki, Member and K. Tanishika, Member.

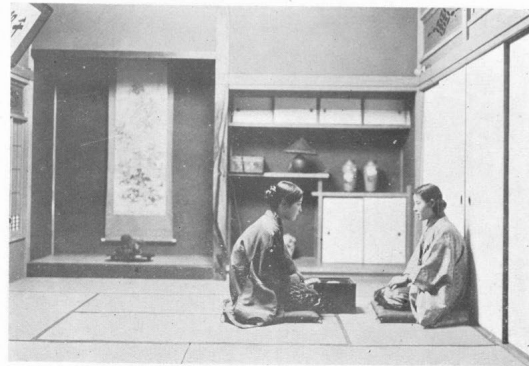
A
硝子外球
を中央に
つけた場
合。實驗
番號(7)



B
紙張り器
具を室の
中央につ
けた場
合。實驗
番號(3)



C
紙張り器
具を室の
4隅につ
けた場
合。實驗
番號(1)



第 11 圖

谷崎潤一郎（1886–1965）と『陰翳礼讃』

- 藤井厚二より2歳年上
- 雑誌『経済往来』1933（昭和8）年12月号
および1934（昭和9）年1月号に掲載された
随筆
- 伝統的な日本美の根源である陰翳を讃美
- 近代批判
- アジア主義
- 近代主義的な視座



日本間と電灯の不調和

今日、普請道楽の人が純日本風の家屋を建てて住まはうとすると、電気や瓦斯や水道等の取付け方に苦心を払い、何とかしてそれらの施設が日本座敷と調和するやうに工夫を凝らす風があるのは、自分で家を建てた経験のない者でも、待合料理屋旅館等の座敷へ這入ってみれば常に気が付くことであらう。（p. 42）

実際電燈などはもうわれわれの眼の方が馴れっこになってしまっているから、なまじなことをするよりは、あの在来の乳白ガラスの浅いシェードを附けて、球をムキ出しに見せて置く方が、自然で、素朴な気持もする。（pp. 42-43）

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」 谷崎潤一郎編『鶉鷓隴雜纂』 日本評論社 1936 pp. 42-89

紙が生み出す柔らかい光の再発見

既に行燈式の電燈が流行り出して来たのは、われわれが一時忘れていた「紙」と云ふものの持つ柔かみと温かみに再び眼ざめた結果であり、それの方がガラスよりも日本家屋に適することを認めて来た証拠であるが、便器やストーヴは、今以てじっくり調和するやうな形式のものが売り出されてゐない。（p. 48）

分けても私は、書院の障子のしろじろとしたほの明るさには、ついその前に立ち止まって時の移るのを忘れるのである。元来書院と云ふものは、昔はその名の示す如く彼処で書見をするためにあゝ云ふ窓を設けたのが、いつしか床の間の明り取りとなったのであらうが、多くの場合、それは明り取りと云ふよりも、むしろ側面から射して来る外光を一旦障子の紙で濾過して、適当に弱める働きをしてゐる。（p. 65）

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」 谷崎潤一郎編『鶉鷓隴雜纂』 日本評論社 1936 pp. 42-89

暗い室内空間が生み出した物質文化

もしあの陰鬱な室内に漆器と云ふものがなかったなら、蠟燭や燈明の醸し出す怪しい光りの夢の世界が、その灯のはためきが打ってゐる夜の脈搏が、どんなに魅力を減殺されることであらう。まことにそれは、昼の上に幾すぢもの小川が流れ、池水が湛へられてゐる如く、一つの灯影を此处彼処に捉へて、細く、かそけく、ちらちらと伝へながら、夜そのものに蒔絵をしたやうな綾を織り出す。（pp. 57-58）

漆器の椀のいゝことは、先づその蓋を取って、口に持って行く迄の間、暗い奥深い底の方に、容器の色と殆んど違はない液体が音もなく澱んでゐるのを眺めた瞬間の気持である。人は、その椀の中の闇に何があるかを見分けることは出来ないが、汁がゆるやかに動揺するのを手の上に感じ、椀の縁がほんのり汗を搔いてゐるので、そこから湯気が立ち昇りつゝあることを知り、その湯気が運ぶ匂ひに依って口に啣む前にぼんやり味はひを豫覚する。（p. 58）

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」 谷崎潤一郎編『鶉鷓隴雜纂』 日本評論社 1936 pp. 42-89

近代主義者としての谷崎

諸君は又さう云ふ大きな建物の、奥の奥の部屋へ行くと、もう全く外の光りが届かなくなった暗がりの中にある金襴や金屏風が、幾間を隔てた遠い遠い庭の明りの穂先を捉へて、ぽうっと夢のやうに照り返してゐるのを見たことはないか。その照り返しは、夕暮れの地平線のやうに、あたりの闇へ実に弱々しい金色の明りを投げてゐるのであるが、私は黄金と云ふものがあれほど沈痛な美しさを見せる時はないと思ふ。（p. 67）

が、暗い家に住んでゐた昔の人は、その美しい色に魅せられたばかりでなく、かねて実用的価値をも知ってゐたのであらう。なぜなら光線の乏しい屋内では、あれがレフレクターの役目をしたに違ひないから。（p. 67）

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」 谷崎潤一郎編『鶉鷓隴雜纂』 日本評論社 1936 pp. 42–89

「闇」と「陰翳」

寺院のみならず、宮殿でも、庶民の住宅でも、外から見て最も眼立つものは、或る場合には瓦葺き、或る場合には茅葺きの大きな屋根と、その庇の下にたゞよふ濃い闇である。＜中略＞美と云ふものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを餘儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添ふように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依って生れてゐるので、それ以外に何もない。（pp. 61-62）

たとへばわれわれが毎朝たべる赤味噌の汁なども、あの色を考へると、昔の薄暗い家の中で発達したものであることが分る。＜中略＞いつもは何でもなくたべてゐたあのどろどろの赤土色をした汁が、覚束ない蠟燭のあかりの下で、黒うるしの椀に澱んでゐるのを見ると、実に深みのある、うまさうな色をしてゐるのであった。＜中略＞かく考へて来ると、われわれの料理が常に陰翳を基調とし、闇と云ふものと切っても切れない関係にあることを知るのである。（p. 60）

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」 谷崎潤一郎編『鶉鷓隴雜纂』 日本評論社 1936 pp. 42-89

小結

- 認識上日本家屋の闇は徹底的に否定
- 隣り合わせにあった闇は、電気照明の台頭により完全に駆逐
- 人々の明るさや屋内空間を巡る認識は、局部照明的な空間認識から全般照明的（ユークリッド的）な空間認識へと転化
- 日常が急激かつ劇的に明るくなる一方、電灯の眩しさに対する反動が起こる
- 紙貼りの照明デザイン
- 日本的な美を求める藤井や谷崎の視点もまた近代的、合理的、全般照明的
- 紙が生み出す散光や陰翳を日本の伝統的な美として（再）定義したというよりも、むしろ光学的かつ建築的に操作可能なものとして創造した

3 結びにかえて

惑星時代の人間—新しい科学や技術は何をもたらすか？

- 電気という目に見えないものが電光や動力となって現れ、社会や人間の心身に大きな影響を与えた
- 人間に新しい生のあり方を求める

最も重要なのは、いわゆる政治的な空間をこれまで記号化してきた諸源泉に還元することのできない、権力の新たな源泉と正当化の新たな源泉を、彼ら全員が作り出しているということである。彼らは新たな諸力を用いて政治的な相互作用を徹底的に刷新するのだから、その彼らを「社会的または政治的な説明」に換言することはできない。（p. 90）

ブリュノ・ラトゥール『パストゥールあるいは微生物の戦争と平和、ならびに「非還元」』 荒金直人訳 以文社 2023

惑星時代の人間—新しい生

- 台頭する新しい科学や技術に対して「伝統らしき」ものが呼び起こされる
藤井厚二にとっては、紙によって生み出される（科学的に操作可能な）散光
谷崎潤一郎にとっては、闇ではなく「美の目的に添うように」利用される陰翳
- 今日においても、新しい生のあり方を模索する上で「伝統らしき」ものが呼び起こされている
溝口勝先生にとっては、昔ながらの農のある生活
高橋伸一郎先生にとっては、和食
羽藤英二先生にとっては、漁村において古くから続いている営み
- これらの模索こそが福永真弓先生のおっしゃる「サルベージ」を成立させている

惑星時代の人間—何に対して「伝統らしき」ものなのか？

- （意識的か否かを問わず、反動の対象は）科学や技術そのもの＝西洋近代？
- 西洋中心的ロゴスからのdis-location（酒井直樹先生）
- 藤井や谷崎は「西洋 vs 日本（東洋、非西洋）」の対立軸に意識的

西洋としての電灯

和風住宅に於ける室内の光線は洋風住宅のそれに比すれば、著しく軟かきを以て頗る快感を与へます。＜中略＞洗練せられたる日本趣味として声を大になして誇るものであると信じます。（p. 144）

＜前略＞其の住宅の構造或は機械的設備を欧米の先進諸国に学べば、趣味の点に於ても在来のものは全く捨てて西洋趣味に移らねばならないものと誤解せる人もありますが、之は洵に遺憾なることにして、鉄筋混凝土の住宅にても腰掛式生活の住宅にても、日本趣味は採用し得るものにて長く存続せしめ其の美点を享有したいと思ひます。（p. 144）

藤井厚二『日本の住宅』岩波書店 1932

西洋としての電灯

<前略>もし東洋に西洋とは全然別箇の、独自の科学文明が発達してゐたならば、どんなにわれわれの社会の有様が今日とは違ったものになってゐたであらうか、と云ふことを常に考へさせられるのである。(p. 49)

西洋の方は順当な方向を辿って今日に到達したのであり、我等の方は、優秀な文明に逢着してそれを取り入れざるを得なかった代りに、過去数千年来発展し来った進路とは違った方向へ歩み出すやうになった、そこからいろいろな故障や不便が起つてゐると思はれる。<中略>そこでわれわれは、機械に迎合するやうに、却つてわれわれの藝術自体を歪めて行く。西洋人の方は、もともと自分たちの間で発達させた機械であるから、彼等の藝術に都合がよいやうに出来てゐるのは当たり前である。そう云ふ点で、われわれは実にいろいろの損をしてゐると考へられる。(pp. 51-52)

谷崎潤一郎「陰翳礼讃」 谷崎潤一郎編『鶉鷓隴雜纂』 日本評論社 1936 pp. 42-89

故郷回帰（homecoming）のジレンマ

- ユク・ホイ『中国における技術への問い—宇宙技芸試論』2022 (2016)
- 西洋のロゴスと科学技術の間には一貫性がある
- 非西洋の宇宙論と科学技術の普遍性の間に一貫した関係を求めることは可能か？



ユク・ホイ『中国における技術への問い—中国技芸試論』伊勢康平訳 ゲンロン叢書 2022(2016)
ゲンロンウェブサイト <https://genron.co.jp/shop/products/detail/623>

故郷回帰（homecoming）のジレンマ

＜前略＞ハイデガーが指摘していたのは、伝統の破壊やあらゆる「故郷」の消失という、テクノロジーの惑星化がもたらす問題だったのだから。それはむしろ、テクノロジーのグローバル化によって生じる重大な帰結をあらためて考えるため、単なるナショナリズム批判を超えて取り上げなければならない問いなのだ。もしこの「故郷回帰」（homecoming）のジレンマを理解できなければ、総力戦という犠牲を払ってまで世界史を再建しようとした京都学派や、或いはテロリズムによってグローバル化による問題を乗り越えられると信じているイスラーム過激主義のような、狂信的な言動に帰結してしまうだろう。テクノロジーのグローバル化と正面から向きあわないかぎり、狂信の燃えさしが絶えることはない。そして、それはさまざまなかたちでヨーロッパ内外の随所へ広がってゆくことだろう。じっさい、二十一世紀の最初に二〇年間は、まさしく私たちには近代を乗り越える力がないことを映しだしていたといえる。（p. 374）

ユク・ホイ『中国における技術への問い—宇宙技芸試論』伊勢康平訳 ゲンロン叢書 2022(2016)

まとめ—空間・技術・創造力

- 新しい科学や技術の応用は人間自身の新しい生を要求
- 現在の私たちと新しい人間の生の間に補助線を引くために「伝統的なもの」が探される（＝故郷回帰の一環）
- その作業は土地や空間に刻み込まれ、思った以上に長く私たちの物質文化に影響を与える
- 現在の私たちと新しい人間の生の間に引かれる補助線のあり方は理屈では説明され得ない
- 創造性の余地



奈良県橿原市高木家住宅 18世紀後期建設
2013年6月1日撮影

RESEARCH ARTICLE

Modernity of Electric Light and Shadow: Japanese Domestic Architecture from the Late 1910s to the Early 1930s

Shuntaro Nozawa

Electric light became popular as a source of illumination in Japan between the late 1910s and the early 1930s. It created novel sensory spaces that made the former darkness of domestic architecture a thing of the past. This article explores the ways in which domestic spaces became overwhelmingly lit by electric lights and how the architect Fujii Koji reacted to them in lighting and architectural design. The shift from embedded local illumination to general lighting entailed changing perceptions about indoor light conditions and how the light-body-space triad revolved around the rejection of interior darkness by electricity-related businesses, manufacturers, and academia. From the mid-1920s onward, this process was further enhanced by the Domestic Electricity Promotion Association, whose illumination planning, exhibitions, and model houses manifested its functionalist approach to effectively distributing light throughout the house, an approach subtly underpinned by a romantic vision of the domestic use of electric light. Functionalism in interior lighting, and the excessive brightness of electric light in domestic spaces, meanwhile, were questioned by Fujii and some lighting engineers. The disharmony between the glare of electric light and the Japanese style of rooms led him to create distinctive papered light fittings installed in his experimental houses, including Chōchikukyo. Fujii's endeavours to scientifically understand and architecturalise diffused light through *washi* (Japanese paper) are conceptually similar to cultural critic Tanizaki Jun'ichiro's *In Praise of Shadows*, an essay that rediscovered the systematically manipulable agents that produced Japaneseness: shadows in response to aesthetic discord caused by the emergence of electric light.

ダイキン東大ラボ後援 EAAトークシリーズ



空気のデザインー共に変容する

Designing Air – Through Changing Together

第2回 関康一郎 × 齋藤帆奈
(ダイキン工業株式会社 / プロダクトデザイン) × (現代美術作家 / バイオアート)

空気のブランドのデザイン

2024/6/12 (水) 17:30–19:15 (開場 17:00)

参加無料
東京大学八重洲アカデミックコモンズ
(定員 40 名)
会場&オンラインのハイブリッド開催
要事前登録



ダイキン東大ラボ後援 EAAトークシリーズ



空気のデザインー共に変容する

Designing Air – Through Changing Together

第3回 吉本尚起 × 片岡真伊
(株式会社日立製作所 / エネルギーシステム) × (国際日本文化研究センター / 日本近現代文学・翻訳研究)

地域を共有する ー空気・風土そしてエネルギーー

2024/7/2 (火) 17:30–19:15 (開場 17:00)

参加無料
東京大学八重洲アカデミックコモンズ
(定員 40 名)
会場&オンラインのハイブリッド開催
要事前登録



第4回 松尾俊彦 (東日本旅客鉄道株式会社) × 中西もも (農学生命科学研究科 / One Earth Guardians)
2024/7/30 (火) 駒場Iキャンパス
* 今月下旬に詳細公表